

幻の旅プラン

机の上に大判の時刻表と一枚の写真がおかれている。真冬の雪深い山峡に千曲川の流れが深い藍色でゆつたりと蛇行て雪景色を水面に写している。背後の山々の斜面は冬枯れの木々と積もった雪で淡い濃淡となって覆われ、深い雪の白い斜面に針葉樹の木々が黒い塊のよう配置され、その組合わせがジグザクと谷の奥くまで折り重なるよう続いている。

前掲には雪シエルタから抜けでてきた2両編成のローカル列車が川に沿って走り雪原に単線のシユブルがうねつて描かれている。日本一の豪雪地帯を走る飯山線にゆつたりと乗つて車窓から雪深い景色を眺めたい。上越新幹線を早朝に乗れば飯山線を楽しんで夕刻前の信越線に乗れば夜には上野に日帰りもできるし、野沢温泉で泊まって雪見風呂の趣もよい。そんな時刻表での旅を夢みてみた。

上野から『あさひ』に乗つて越後湯沢か浦佐で信越線に乗り換えて越後川口から飯山線に入る。信濃川に沿つて上流に向かうと『ちじみ』の町で有名

な十日町につく。ここは三八サンパチ）豪雪のときは二日で二尺を超す大雪が降つた豪雪地帯もある。県境に近づくにつれて山は深くなり雪はますます深くなる。長野県側に越えた最初の駅が森宮原である。

JRの駅のなかで日本一の積雪の深さ七尺八五センの記録をもち、気象庁の公式記録となつている富山県真川の七尺五〇センの記録をしのいでいる。山向こうの中頸城郡でも昭和の始めに二丈八尺八尺一八センが記録されたと伝えられている豪雪地帯で二階まで埋まる雪の壁の高さとなる。

信濃川から千曲川と名を変えた流れを遡ると、戸狩野沢温泉駅となり飯山も近い。一晩に四尺も降り積つて雪に埋もれる飯山を過ぎると、一里一尺といつた具合に雪が急に少なくなる。

飯山線の終着駅の豊野を通つて長野から『あすさ』で上野には午後七時頃には戻れる。忙しさでついに机の上で終わつてしまつたが、気象を生活の糧にしている筆者としては幻の旅の効用は大きい。五月には東京から上越新幹線で新潟に出て白新線から羽越、奥羽本線の『いなほ』で青森へ、そして函

館から北斗で札幌までという旅プランが本実行できたが、さて今年の夏がどうなることだろうか。 村松 照男